

タイ東北部、 モン族難民キャンプでの 国境なき医師団の活動

—— 強制送還におびやかされる人びとの傍らで



©Francesca Di Bonito

ラオスのモン族難民 —背景—
ラオスには人口の8%にあたる45万人のモン族が居住しており、国内で3番目に大きい民族を構成している。モン族のなかには、ベトナム戦争時に米国政府に協力したことから、ラオス共産党政権により政治的迫害を受けてきた人びとがいる。彼らの多くはベトナム戦争終結後に米国などに亡命したが、ラオスに残った人々に対する迫害は続いており、身の安全を求めてタイなどに逃げる人が後を絶たない。



このキャンプで、望まない送還の恐怖におびやかされる人びとに對し、医療・心理ケアをはじめとするさまざまな支援を提供している国境なき医師団(MSF)の活動をお伝えします。

2008年も数度にわたり強制送還が実施されました。タイ政府は、現在ファイ・ナム・カオ村のキャンプにどどまっている6000人についても送還する意向であることを明らかにしています。

彼らは現在生命の安全の保障もないまま、ラオスに強制送還される危機に直面しています。タイ政府はモン族難民を国際法の下で保護すべき難民として認めておらず、ラオス政府との取り決めにもとづいて強制的に送り返す方針をとっているからです。

タイ東北部、ペッチャブン県ファイ・ナム・カオ村の難民キャンプでは、政治的迫害を受けてラオスから逃ってきたモン族難民が避難生活を送っています。

MSFは2005年7月から、
ファイ・ナム・カオ村のキャンプでの
支援を行っています。
以下のような包括的な支援によって、
人びとの健康状態の悪化や
感染症の流行を防ぐことができています。

▶ 診療・妊産婦ケア



1日平均15件の妊婦検診を含む平均130件の診療がおこなわれている。多く見られる疾患は、呼吸器感染症、下痢、皮膚や目の疾患など。妊産婦は24時間態勢で診療しており、月に平均25件の出産がある。緊急治療や特別な検査を必要とする患者はキャンプ外にある公立病院に移送している。

▶ 心理ケア

調査結果にもとづき、2007年11月に開始された（詳細は本文参照）。

▶ 予防接種



多くの人が密集している難民キャンプでは、効果的な予防接種をおこなうことが不可欠である。MSFが予防接種をおこなったことで、2007年にはキャンプ内のすべての子どもが予防接種カードを持ち、95%は接種済みという高い水準を維持することができている。

▶ 食糧配給



調査にもとづいて食糧配給を始めたことにより、人びとの栄養状態は目に見えて改善された。約1,150家族に対する食糧配給をおこなっている。

▶ 水・衛生・物資配給



給水および衛生設備を整え、炭・石鹼などの物資の配給を毎週おこなっている。

MSFは2005年7月から、
ファイ・ナム・カオ村のキャンプでの
支援を行っています。
以下のような包括的な支援によって、
人びとの健康状態の悪化や
感染症の流行を防ぐことができています。

鉄条網に囲まれたキャンプ

1日平均15件の妊婦検診を含む平均130件の診療がおこなわれている。多く見られる疾患は、呼吸器感染症、下痢、皮膚や目の疾患など。妊産婦は24時間態勢で診療しており、月に平均25件の出産がある。緊急治療や特別な検査を必要とする患者はキャンプ外にある公立病院に移送している。

タイのキャンプは鉄条網に囲まれており、
迫害に起因する心的外傷に苦しんでいる
ため、MSFは心理ケアの提供を行ってい
ます。ケアを受けた人のうち、9割を超
える患者が、襲撃、密林を隠れながら逃げ
回った経験、レイプ、拷問、飢え、家族の死
について語っています。またMSFが診察し
た患者のうち、少なくとも181人が銃
撃によるとみられる傷を負っていました。

「いつも軍の兵士に追われていました。
ときには、飛行機から有毒な黄色のガス
がまかれることもありました。わたしたち
は森のなかを走って逃げなければなりませ
んでした。たくさん的人が死んでいくのを見
ました…」

—— 22歳の女性

「2002年、夫とともに兵士に捕まえら
れたときには、飛行機から有毒な黄色のガス
がまかれることもありました。わたしたち
は森のなかを走って逃げなければなりませ
んでした。たくさん的人が死んでいくのを見
ました…」

—— 20歳の女性



© Francesca Di Bonito

心理ケアの一環

キャンプの人々はラオスで受けた暴力や
迫害に起因する心的外傷に苦しんでいる
ため、MSFは心理ケアの提供を行ってい
ます。ケアを受けた人のうち、9割を超
える患者が、襲撃、密林を隠れながら逃げ
回った経験、レイプ、拷問、飢え、家族の死
について語っています。またMSFが診察し
た患者のうち、少なくとも181人が銃
撃によるとみられる傷を負っていました。

近頃の強制送還の実施により、不安感、
睡眠障害、悪夢、絶望感などを訴える人
が増えています。このキャンプで10月まで
医療支援に従事していた島川祐輔医師
は、2008年2月にキャンプ内の住民
12人が強制送還された後、キャンプ内
の緊迫感は最高潮に達し、先が見えない
不安から心因的な不定愁訴を訴える
患者が殺到した、と話しています。

—— 女性

「ラオスには絶対に戻りたくないありません。
自分の家族がたくさん死んだ場所に戻る
くらいなら、ここで死んだほうがましです」

—— 難民の本国籍への帰還は、どんな場合も
自発的でなければならず、生命や安全に
不安を感じている人を強制的に送還し
てはならないことが国際的に定められて

MSFは、恐怖におびえながら劣悪な
環境に暮らしている人びとの傍らで、彼
らの身体的・精神的な苦しみを和らげる
支援を続けることが自らの役割だと考
えています。同時に、人びとが強制送還
されることのないよう、タイ・ラオス両政
府および国際社会に対しても働きかけて
います。

MSFは、医療・人道援助団体として
医療を中心に多岐にわたる支援を提供し
ていますが、人びとがもつとも求めている
「強制送還からの保護」を直接実現する
ことはできません。それは政府や国連機関
にしか果たせない役割です。島川医師は
「『ラオスに帰れば殺される』：患者として
訪れる人びとの言葉を聞いて、私は医師
として現状に対し何ができるのか、日々悩
みました」とも述べています。

人びとの命を守るために

モン族難民に関する情報はWebサイトにも掲載しています。併せてご覧ください。

www.msf.or.jp